

---

## 母性保健看護・助産

報告者：西平朋子

---

### 教育及び実践の課題

---

カンガルーケアと称されるケアには、Neonatal Intensive Care Unit (NICU) で早産児を対象に行われるケアと、正期産新生児を対象に分娩室で行われる母子の早期接触の2種類がある。前者を一般的にカンガルーケアと呼び、後者を skin-to-skin と呼ぶことが多い。ここでは正期産新生児の出生直後に分娩室で行われる母子の早期接触を、日本周産期・新生児医学会などが提案している「Birth Kangaroo Care (BKC)」とする。BKCの有効性については、コクランのシステマティック・レビューでその有効性が科学的に証明されており(Moore,ER,etc,2007)、推奨されるべきケアとして考えられている。一方でBKCが実施される時期は胎児循環から新生児循環への適応がなされる不安定な時期でもあり、実施中の安全や急変への配慮も必要である。全国の産科医療機関を対象とした調査では、BKCを実施しているのは65.4%、実施基準が設けられているのは30.7%であったことが報告されている(久保,2012)。

講義・演習・実習の中で、母子相互作用の促進や母乳栄養率の向上、児の体温保持効果や心拍数減少、血糖の安定化や啼泣時間短縮など、BKCの有効性を紹介するための根拠や安全に実施するための情報提供を行う必要があると考えた。

---

### 活用した論文の概要

---

Walterら(2007)は、BKCによって母乳育児や体温、血糖値が影響をうけるかを調査し報告している。母乳育児に意欲があり、出生1分後から最初の直接母乳が終了するまでBKCをうけた9人の正期産新生児の母親に対する記述的研究である。新生児の皮膚温は出生後1分、5分、その後は15分毎に測定され、血糖値は出生後60分に測定された。新生児が乳房を吸着するまでに要した時間は記録され、母乳育児行動は最初の直接母乳の間観察された。

結果は、体温は、カンガルーケアの間9人中8人が上昇し、低体温になった新生児はいなかった。血糖値は、母乳を与えていない新生児が43-85mg/dlの範囲であり、母乳を飲んだ新生児は43-118mg/dlの範囲であった。1人の新生児を除くすべての新生児は、出生後74分以内に自ら這って直接母乳を開始した。医師はBKCのさらなる効果として、母親の会陰切開や会陰裂傷による縫合時の苦痛を紛らわすことに気づいた。

---

### 教育及び実践への活用

---

BKCの有効性について科学的根拠を示しながら説明を行っている科目には、3年次の周産期保健看護Ⅱ・周産期保健演習および実習、4年次助産学生への助産診断・技術学および助産実習がある。これらの科目の中では、出生直後の新生児の適応過程を踏まえながら安全にBKCを実施するためのガイドラインの紹介も行い、学生が実習や卒後の臨床場面でBKCを推進できる能力を養うための教育を提供している。とくに助産実習では、BKCを分娩助産実習到達度評価の評価項目の1つに挙げて、実践できることを求めている。

---

### 参考文献

---

Marry W. Walter, Kim M. Boggs, Susan Ludington-Hoe. et al.(2007). Kangaroo Care at Birth for Full Term Infants, MCN, 32(6), 375-381.

---